

# 宮崎学園短期大学における成績評価の現状と課題

蓑部 初 木田 達士

## Current situation and problems of grading at Miyazaki

### Gakuen Junior College

Hajime MINOBE Tatsushi KIDA

#### 1. はじめに

平成 9 年 12 月の大学審議会答申「高等教育の一層の改善について」の中で、「学部教育の質の確保や学生の質の保証が、社会からも厳しく求められており、この面からも学習成果の評価について一層の検討が必要となっている。」と記された（大学審議会 1997）。加えて、平成 10 年 10 月の大学審議会答申「21 世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学」において、進学率の上昇に伴う学生の多様化が進む中、「大学の社会的責任として、卒業生の質を確保する（大学審議会 1998）」ことを求め、この中で GPA 制度を活用した大学を参考にしつつ、厳格な成績評価の仕組みを整備することを求めた。この答申がきっかけに、GPA 制度を導入する大学が増加した。さらに、文部科学省が平成 25 年度から取り組んでいる、私立大学等改革総合支援事業において、GPA 制度の導入をしている大学は評価点が加算されることによって、さらにその動きが加速した。文部科学省が行った「平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について」の調査によると、学部段階において、GPA 制度を導入している大学数は、634 大学であり、全体の 62%が導入している（文部科学省 2017）。

しかしながら、GPA 制度の導入だけで厳格な成績評価が行えているとは言えない。佐藤・羽白（2010）によると、GPA 制度の導入と同時に、評価基準の標準化、評価基準の明示、評価基準の国際通用性の確保、学生の自己管理システムの構築という諸課題を関係づけることが重要であると述べられている。したがって、成績評価の厳格化を行うためには、まず、成績評価のデータを収集・分析する教学 IR の構築が必要であって、教学 IR からのデータに基づき、大学に適した評価基準の標準化や明示ができるようなシステムが重要であると言える。本研究では、筆者の勤務する宮崎学園短期大学（以下、本学）における成績評価の厳格化への協議を活発化させる教学 IR の一助として、現在の成績評価の現状を把握し、他大学の取り組みとを踏まえ、今後の課題を取りまとめた。

#### 2. 本学における成績評価の現状

本学は 4 段階評価の成績評価に加えて、平成 26 年度より GPA (Grade Point Average) 制度が導入され、学生便覧には、学期 GPA が 1.5 未満の学生に対しては個別指導を行い、2 学期連続して学期 GPA が 1.5 未満の場合は、保証人同席での指導を行うとしており、場合によっては退学勧

告を行うことがあると記している。表 1 は 4 段階評価と GP (Grade Point) とを比較したものである。

表 1 4 段階評価と GP 評価の比較 (参照: 宮崎学園短期大学学生便覧 2018)

4 段階評価	100 点満点での評価	GP (評価点)
優	90 点以上	4.0
	80 点～89 点	3.0
良	70 点～79 点	2.0
	66 点～69 点	1.0
可	60 点～65 点	
不可	59 点以下	0

表 1 から、GP の評価点は 100 点満点での評価で見ると、10 点ごとに評価区分が変わるのに対し、4 段階評価はそれぞれの評価の点数の上下差を見てみると、「優」が 20 点、「良」は 13 点、「可」が 5 点と均等ではなく、「優」が最も得点幅が広い評価であることがわかる。

#### 2-1. 4 段階評価と GPA 評価の比較

次に、4 段階評価及び GPA 評価による評価結果を分析する。図 1 では、平成 25 年度から平成 29 年度に在籍していた本学学生の成績データを収集し、各年度に学生が履修した科目の評価結果を 4 段階評価ごとに示した。

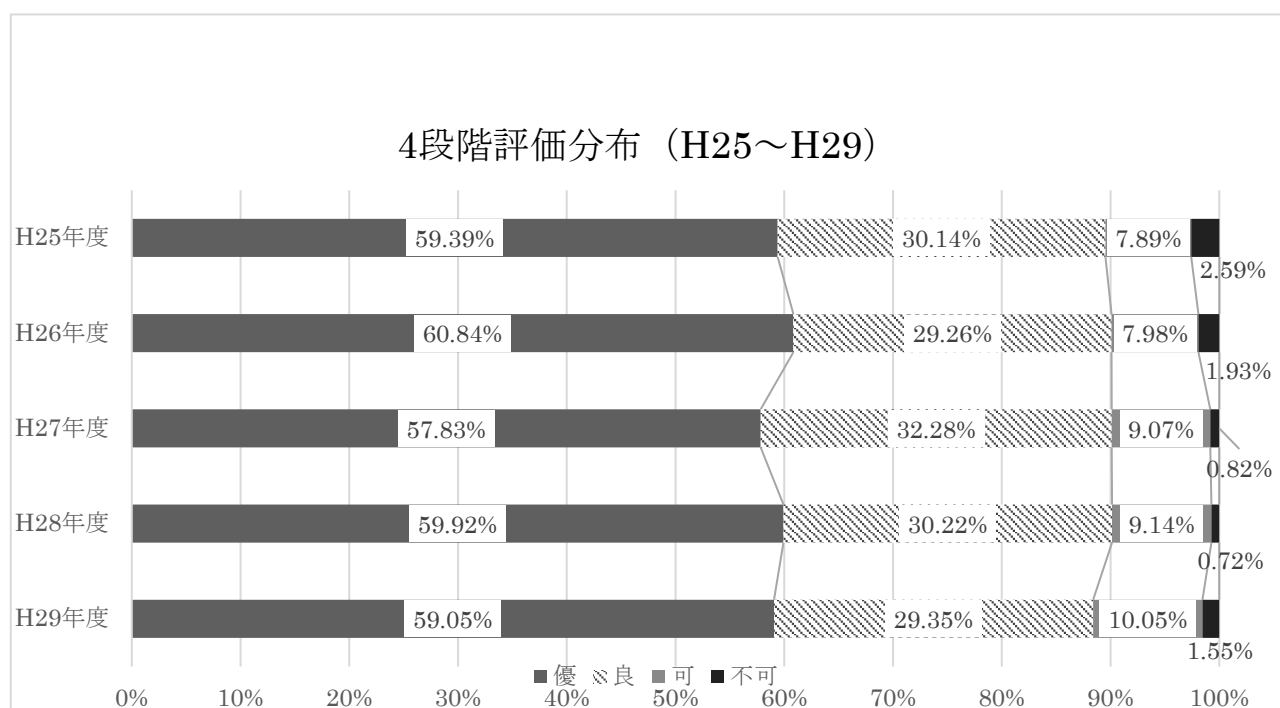


図 1 平成 25～29 年度 4 段階評価分布

前述したとおり、4 段階評価において、「優」の評価を取得した学生は過去 5 年間、ほぼ 60%前後を推移していることがわかる。それに比べて「良」と「可」の評価数は足して 30%から 40%を

推移しており、4段階評価で「優」は、最も良い評価であるにもかかわらず、多くの学生が「優」を取得している状態であることがわかる。この結果だけを見ると、厳格な成績評価が行われていないように見えるが、表1にも示したとおり、4段階評価は各評価段階の得点差が等しくないことがわかっている。したがって、「優」を取得した学生が多い理由として、「優」が最も得点幅のある評価であるという要因によって、他の評価に比べて多くの学生が「優」を取得したとも考えられる。

一方、GPA評価においては、各評価点が均等に区切られており、より正確な成績評価の現状を把握するのに有効である。図1は図2の結果を、獲得した素点に基づき、GP評価に換算してまとめたものである。

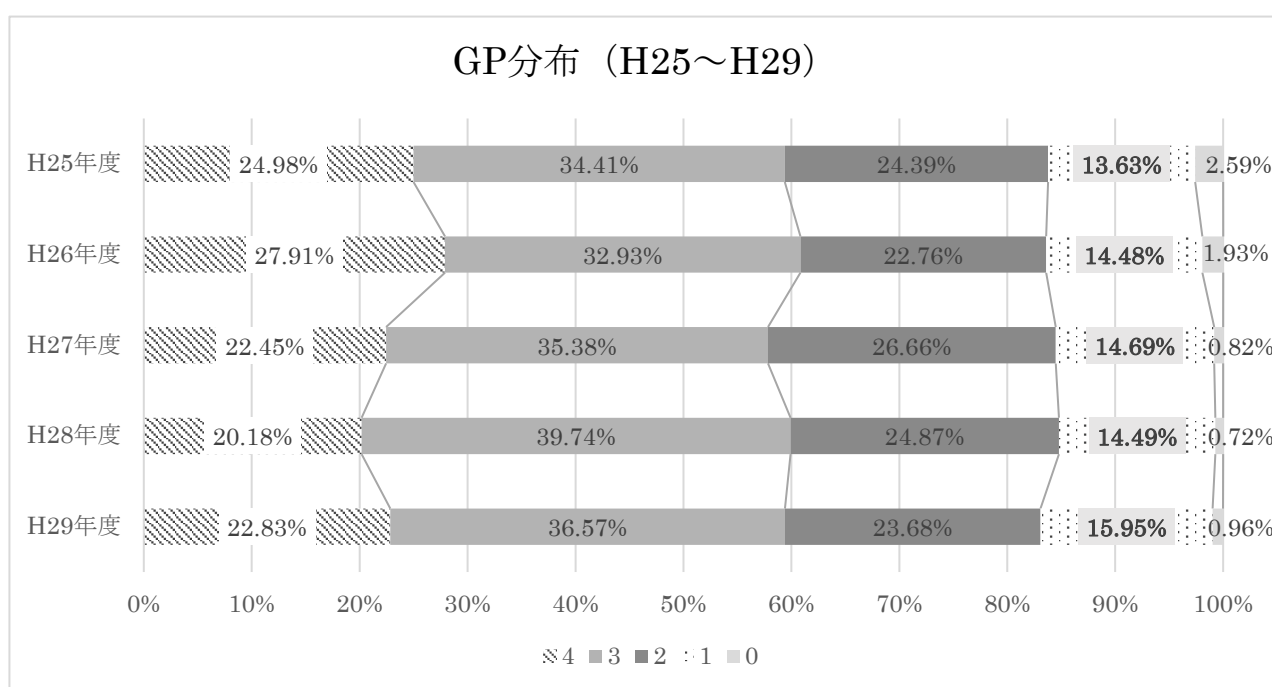


図2 平成25～29年度 GP評価分布

最も優れた評価であるGP4を獲得している学生は、全体の25%程度であり、他の評価とも比べても、それほど多くの学生が取得している状態でないことが図2から読み取ることができる。一方で、GP3を取得している学生は、他評価に比べて割合が多い。GP3は100点満点で換算すると80点から89点であるので、多くの学生が各科目において80%程度の学びを修めていることとなる。本学ではGPごとに評価点に加えて評価基準も設定している。

表2 GP評価基準

GP (評価点)	評価基準
4.0	到達目標を達成し、極めて優秀な成績をおさめている
3.0	到達目標を達成し、優秀な成績をおさめている
2.0	到達目標を十分達成している
1.0	到達目標を最低限達成している
0	到達目標を達成していない

本学の GP に対する評価基準を見ると、GP3 は「到達目標を達成し、優秀な成績をおさめている」とあるため、評価基準から見ると、優秀な成績をおさめている学生が 40% 近く存在している。また GP3 以上を取得している学生が 50% 程存在している状態であり、これは 4 段階評価でみられた状況と類似していることが言える。ゆえに、GPA 評価においても優秀な成績を修めている学生が 60% 程度存在している状況である。

## 2-2. 学科別 GP 比較

では、本学の保育科、現代ビジネス科において、それぞれに GP 評価における差があるのかを過去 3 年間のデータを使って比較したい。

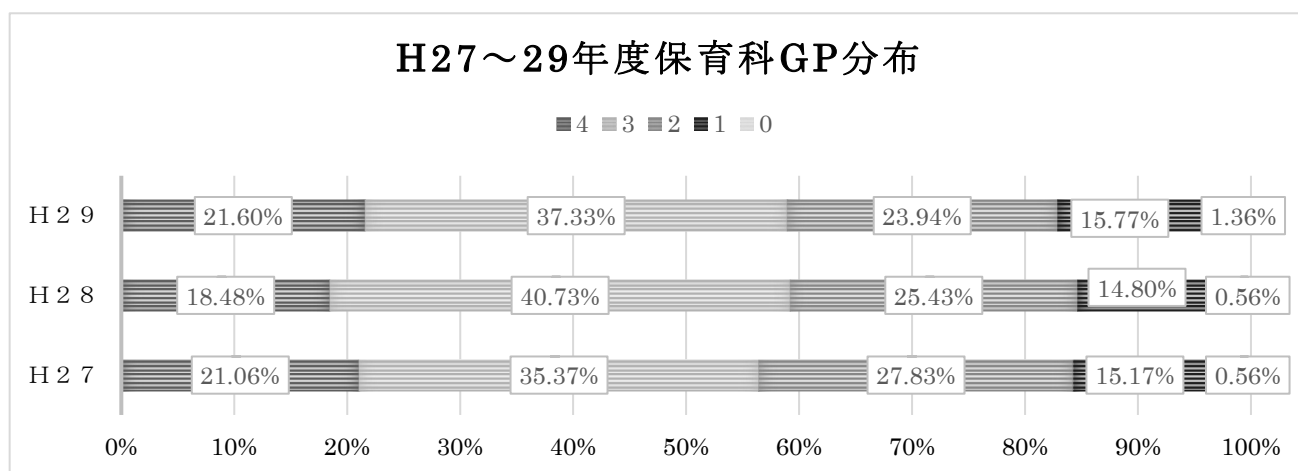


図 3 平成 27～29 年度保育科 GP 分布

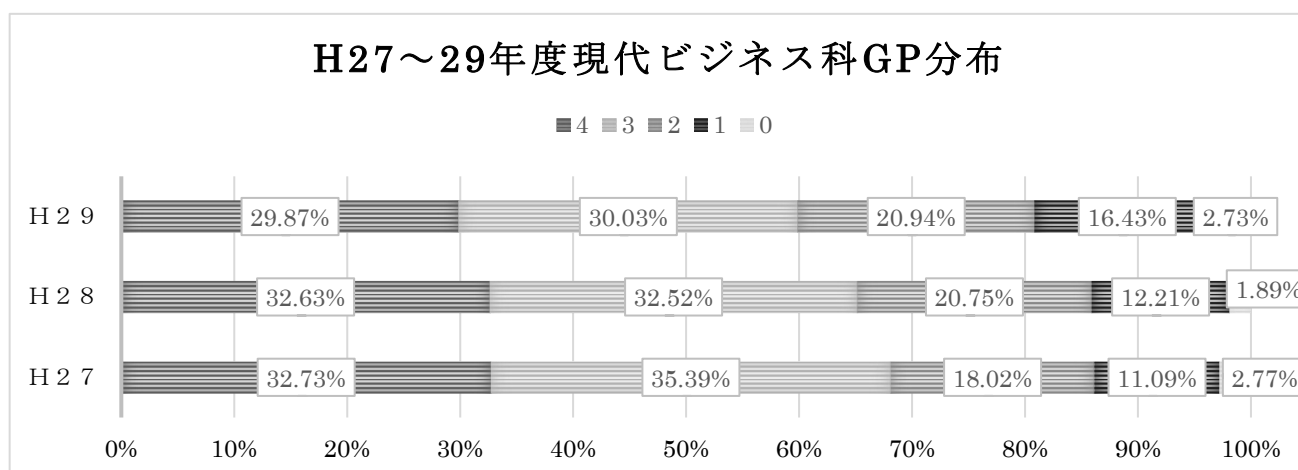


図 4 平成 27～29 年度 現代ビジネス科 GP 分布

保育科の状況を見ると（図 3）、GP3 が 4 割近くを占めており、ほぼ全学の GP 分布状況と同じであった。一方、現代ビジネス科の GP 分布を見ると（図 4）、GP4 の割合が保育科に比べて 10% ほど高く、GP4 と 3 がほぼ同率となっている。また GP0 の値も保育科に比べて高い。このことから、学科によって成績評価に差があることがわかる。考慮すべき点として、科目ごとの履修者数の

違いがある。保育科はクラス単位で授業を実施しているため、1クラス40名程度もしくは2クラス合同（80名程度）で授業を展開している。一方で、現代ビジネス科は多くの授業を25名前後で授業を行っている。平成29年度実績を見ると、年間開講科目96科目（一般教育科目を除く）中、履修者が25名以下の授業が、78科目（81%）であった。少人数教育を行っている現代ビジネス科では、学生の学力レベルの違いにも対応できることが、GP4を獲得している学生が多い要因の1つとして考えられる。

#### 2-4. 科目分類別比較

本学の科目分類は大きく、一般教育科目と専門教育科目の2分類に別けられている。この科目分類において、その授業の特性から成績評価にも差があることが考えられるため、過去5カ年分の一般教育科目と専門教育科目のGP評価分布を比較した。

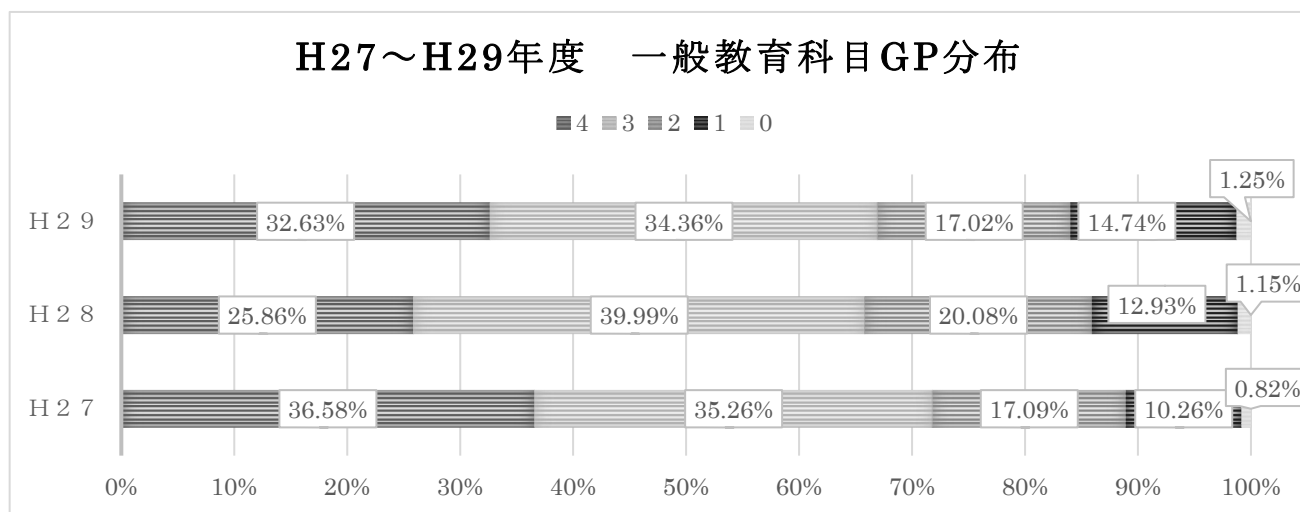


図5 平成27～29年度 一般教育科目GP分布

一般教育科目においては、各年度で差があるものの、大学全体の分布に比べて良い評価がやや多く、GP3以上を取得した学生の割合が65%以上である。一般教育という性質上、教養を深めることを目的とした科目であることから、平均に比べてやや良い評価となっていると考えられる。

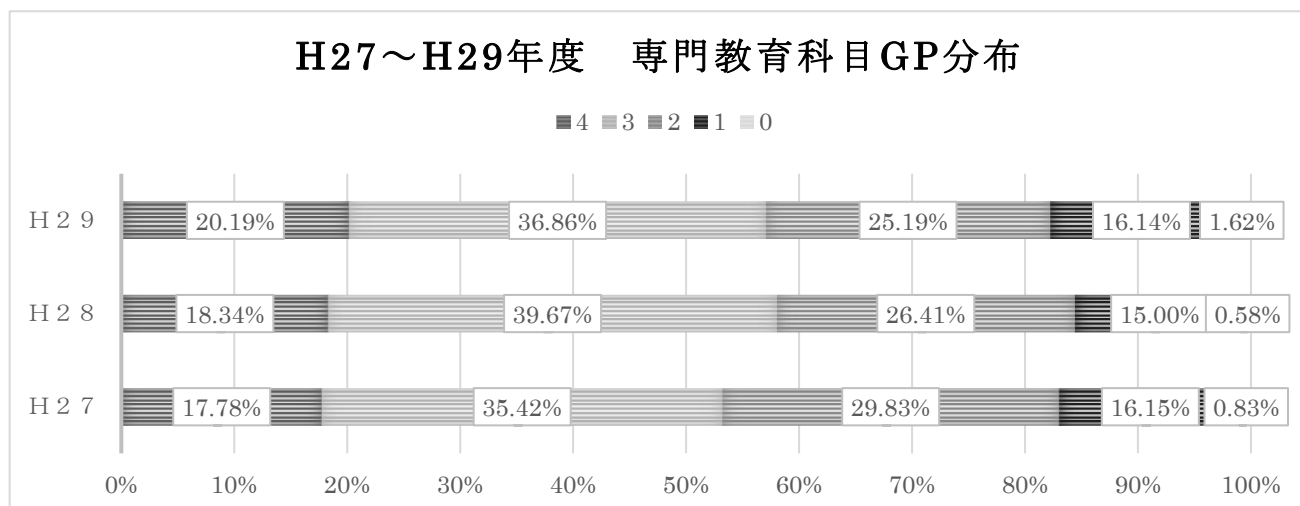


図 6 平成 27～29 年度 専門教育科目 GP 分布

一方、専門教育科目は、一般教育科目に比べて GP 4 の評価を得ている学生は少なく、GP 2 の評価を得た学生が多くなっている。GP 1 の割合も多くなっており、一般教育科目に比べて評価が厳しくなっているといえる。

### 2-3. 教員区分別比較

次に、専任教員と非常勤教員との成績評価を比較する。本学は平成 30 年度、専任教員 34 名、非常勤教員 52 名、同一法人内にある宮崎国際大学及び宮崎学園短期大学附属認定こども園清武みどり幼稚園からの併任講師 7 名で構成されている。

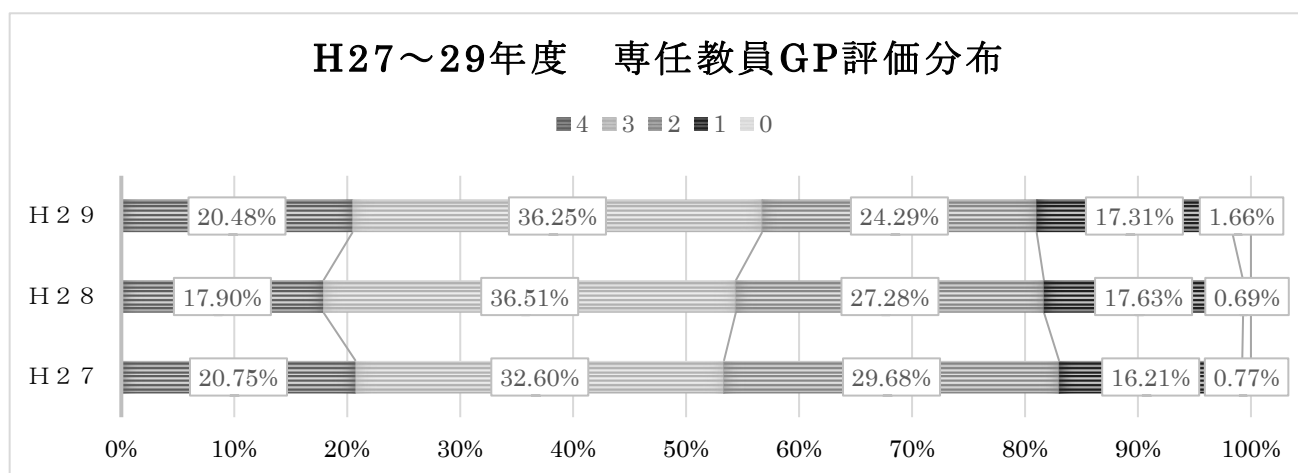


図 7 平成 27～29 年度 専任教員による GP 評価分布

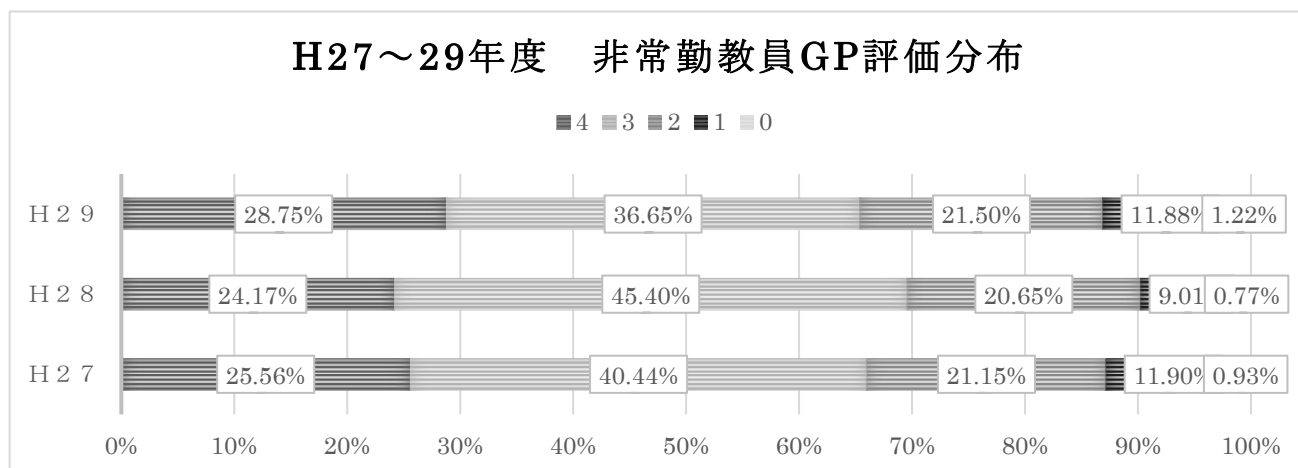


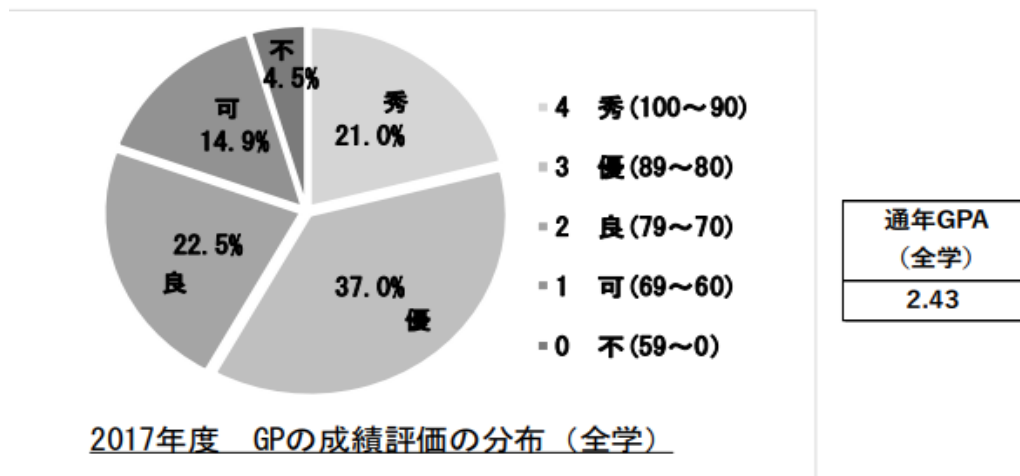
図 8 平成 27～29 年度 非常勤教員による GP 評価分布

専任教員の成績評価をみると（図 7）、GP 4 の割合は学内全体の評価と比較してやや低く、GP 2 の値が全体よりも多くなっている。GP 4 から 2 の割合が同程度になっていることが特徴的である。一方で、図 8 に示した非常勤教員の評価をみると、GP 4 の割合はあまり変わらないものの、GP 3 の割合が突出しておおき、GP 4 から 3 を獲得している学生が平成 28 年度は 7 割近くになり、専任教員の評価に比べて 10% 多く、非常勤教員の成績評価の厳格化が求められる結果となった。

この要因として、専任教員は定期的に FD 活動を行っているほか、月 1 回開催される全教員が参加する拡大教授会においては、学長より成績の厳格化や学生の質を保証するための改革を促す話があり、共通の理解を持つ場が提供されている。一方で、非常勤教員については、年 1 回「非常勤講師の集い」を開催し、学長や、教務部長、学生支援部長から本学の現状について話をしているものの、成績評価などの細かい研修は行っていない。

### 3. 他大学の GP 分布

2017 年度 GP の成績評価の分布と通年 GPA の平均値 (全学)



2017年度 GPの成績評価の分布 (全学)

図9 「2017年度 GPの成績評価の分布と通年 GPAの平均値 (全学)」

(出典：東北福祉大学ホームページ 「成績評価の分布 (GPA 分布) 2017 年度」)

これまで述べてきた本学の成績評価の現状を、他大学と比較して客観的視点から分析する必要があると考え、成績評価を公表している大学のうち 2 大学を取り上げて比較したい。

東北福祉大学は、「社会に対する説明責任、教員間の成績評価基準の平準化とさらなる適正な成績評価、学生の成績の状況に応じた適切な学習支援、学生自らの成績の相対的位置の把握と向上を目的として (東北福祉大学 2017)」2014 年から GP 分布をホームページで公開している。GP 分布をみると、本学と同じように分布していることがわかる。GP3 以上を獲得している学生が 58%と半数以上となっている。特筆すべきは、GP0 の評価が 4.5%あることである。本学の場合は近年 1%に満たない数値になっている。ちなみに、東北福祉大学の GP 評価の 100 点満点での点数区分は本学と同じであった。

左表は桜美林大学が公開している「桜美林大学 Fact Book 2017」のデータを基に筆者がグラフ化したものである。桜美林大学の場合は、GP4 から 0 の他に履修辞退等の数値もあったため、それら GP4 から 0 以外の数値は「その他」の区分にまとめた。桜美林大学の場合は、平成

GP分布 (2016春学期)

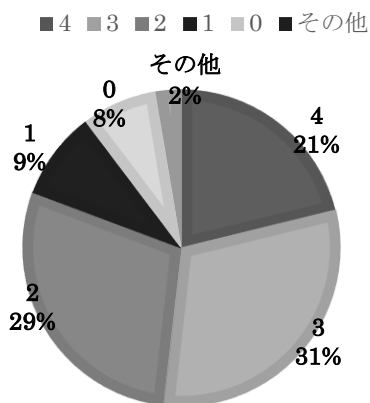


図10 桜美林大学2016年春学期 GP分布  
【参照】桜美林大学Fact Book 2017 (グラフは筆者)

22年度より、学長より発信された「成績評価の適正化についてのガイドライン」により、AとBの評価(GP4、3)について上限を設けた相対評価を導入しており(桜美林大学 2010)、それまでGP4(A評価)が30%を超えている状態が続いていたが、平成22年度より20%前後を推移している。またGP0も8%存在している状態であり、平成24年度の日本高等教育評価機構によって行われた認証評価では「単位認定、進級及び卒業・修了認定などの基準の明確化とその厳正な適用がなされている(日本高等教育評価機構 2012)。」と、この取組が評価されている。

#### 4. 成績評価の厳格化に必要なこと

各大学それぞれに、成績評価を厳格化するために情報公開や部分的相対評価の導入など様々な取り組みを行っていることがわかった。ここで、先行研究等を基に成績評価の厳格化に必要なことは何であるかをまとめたい。

第一に、学習目標の明確化である。豊田・市川は成績評価の厳格化の前提条件として、「学習目標の明確化が必須である(豊田・市川 2007)」と述べている。学習目標が明確でなければ、学習内容を測定することも難しく、ゆえに成績評価も厳格に行うことができない。学習目標を明確にすることによって、たとえば「不可」の成績を与えたとしても、その目標が明確であるゆえに、説明責任を果たすことが容易となる。明確な授業目標の作成の仕方として、佐藤は、学生を主語とし、この授業がなぜ必要なので、この授業での学びがどのように使用されるのかを記述することが必要であると述べている。また到達目標においては、概念的な言葉ではなく、「○○できる」などの観察可能な行動で表現し、動詞は知識・態度／習慣・技能の三領域に分けて記述することで、より学生が理解しやすい目標となると述べている(佐藤 2010)。学生の実態に合わせた目標を学生にわかりやすい表現でシラバスに記載することが求められる。

第二に、桜美林大学でも取り組まれている、部分的な相対評価の導入である。先に述べたように、最上位の成績評価が大学全体の6割を占めている状態では、その成績の価値が下がってしまう。成績評価の価値を担保し、学外から成績評価に対する信頼を確保する必要がある。しかしながら、相対評価導入に関しては、学習目標設定が的確であり、またその指標も大学レベルにも適切であれば、必然的に絶対評価であっても、相対評価のような結果になることも考えられる。導入に際しては、安易に相対評価の導入を行うのではなく、各大学にあった実情を理解した上で検討するべきである。

第三に、学内における成績評価のチェック体制の構築である。教育課程レベルにおいて、学習目標が明確に定められているか、その目標に対して適切な指標(アセスメント)が設定されているか、また最終的に適切な成績評価がなされているかを学内において相互評価することにより、より厳格な成績評価に近づくことができる。

#### 5. 本学における成績評価の課題

本研究では、本学の成績評価の現状分析及び他大学の取り組みを論じ、本学の成績評価における課題が明らかになった。1点目は、4段階評価では、学生の学習成果の本質を表現できていない点である。本学は成績証明書に4段階評価を使用している。しかし、4段階評価で記された「優」には大きな幅があり、またそれは全体の半数以上を占めている。これでは本学の「優」の質が担保されていない。成績証明書は公の文書として、外部に発行される証明書であり、この証明書によって、本学の質を証明することとなる。GPA評価と併せて「秀・優・良・可・不可」といった5段階評価にする、もしくはGPA評価を併せて記載するなどして、より正確に学生の学習成果を読み取れ



るよう記すべきである。

つぎに、成績評価基準の設定の必要性である。専任教員と非常勤教員とに成績評価の差が生じていたように、教員によって成績評価に差が生じることは望ましくない。まずは、成績評価に対する指標を作成し、それに基づき成績評価をすることが重要である。この指標作成においては、一般教育科目や専門教育科目といった、科目分類によっても違うことが明らかになった。このことは授業形態も影響することが考えられる。評価基準にあたっては、そういった様々な要因を配慮しつつ、適切な基準の作成に留意しなければならない。また、基準が作成された際には、専任教員だけでなく、先に述べたように非常勤教員も含めた FD 研修を開催するなどして、非常勤教員とも共有し、大学全体で取り組まなければならない。評価した結果については、各学期・年度ごとにデータ収集及び分析を行い、PDCA サイクルのなかで本学に適した独自の成績評価基準の確立が求められる。

2018 年 11 月に中央教育審議会より「2014 年に向けた高等教育のグランドデザイン」が答申された。この中で「教育の質の保証と情報公表－「学び」の質保証の再構築」(中央教育審議会 2018) という項目で再度質保証の重要性が述べられている。科目レベルでの評価は高等教育における質保証の土台ともいえるべき、最も重要な基礎である。本研究を皮切りに本学の教学 IR をより進展させ、内部質保証の一つの取組みとして、成績評価に関する協議を活発化させ、成績評価の厳格化に取り組むことが必要だ。

本研究では、過去 5 年から 3 年間の学生成績データを集約し現状把握をすることで、教学 IR の一歩を踏むことができた。今後は、このデータをもとに更に細かい分析を行い、成績評価だけでなく、中小規模大学における IR 組織の活発化に必要な取り組みについて研究を深めたい。

#### 参考(引用)文献

東北福祉大学 成績評価の分布 2018

[https://www.tfu.ac.jp/ir/s9n3gg000000fxux-att/gpa\\_2017.pdf](https://www.tfu.ac.jp/ir/s9n3gg000000fxux-att/gpa_2017.pdf) (2019 年 1 月 7 日閲覧)

佐藤慶太、羽白洋 香川大学教育研究第 7 巻 2010

文部科学省、私立大学等改革総合支援事業(平成 29 年度)

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm) (2019 年 1 月 7 日閲覧)

文部科学省、「平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426_1.pdf) (2019 年 1 月 7 日閲覧)

桜美林大学、2010、「桜美林大学 自己点検・評価報告書 2010」

[https://www.obirin.ac.jp/about/r11i8i0000006mad-att/2010\\_repot.pdf](https://www.obirin.ac.jp/about/r11i8i0000006mad-att/2010_repot.pdf) (2019 年 1 月 7 日閲覧)

日本高等教育評価機構、2012、「桜美林大学 平成 24 年度大学機関別認証評価 評価報告書」

<http://www.jihee.or.jp/kikanbetsu/2012/06oubirin.pdf> (2019年1月7日閲覧)

大学審議会、1997、「高等教育の一層の改善について(答申)」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_daigaku\\_index/toushin/1315873.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315873.htm)

(2019年1月7日閲覧)

豊田雄彦・市川博、2007、「GPA制度の導入による適切な成績評価」『自由が丘産能短期大学紀要第40号』

佐藤浩章、2010、「大学教員のための授業方法とデザイン」玉川大学出版部